

日本天文学会創立百周年記念講演会・祝賀会開催報告

社団法人日本天文学会は、1908（明治41）年の創立より本年で百周年を迎えました。それを記念して、去る2008年3月23日（日）、日本天文学会創立百周年記念講演会（学術総合センター—橋記念講堂）および祝賀会（学士会館）を開催いたしました。

講演会には約300名の方が参加され、以下の式次第に従って執り行われました。

- 開会の辞
- 基調講演「日本天文学会百年の歩み」
土佐 誠（日本天文学会理事長）
- 来賓祝辞
文部科学大臣：代読
日本学術振興会：小林 誠理事
- 記念切手贈呈式（日本郵便事業株式会社）
- 記念講演「天文学の百年」
尾崎洋二（東京大学名誉教授）

当日は開場時間よりも早く来場される方もおられ、併設していた「天文学百年写真展」をご覧いただいたり、懐かしいお仲間と話をされている方々も多く見受けられました。講演会は、土佐 誠理事長による基調講演「日本天文学百年の歩み」で始まり、学会創立百年の歴史を振り返るととも



（郵便事業株式会社提供）



に本会学会事業の発展についての講演がありました。来賓祝辞では、渡海紀三朗文部科学大臣（代読：磯谷桂介学術研究助成課長、掲載のとおり）、日本学術振興会を代表して同会小林 誠理事より祝辞を賜り、また、日本学術会議等からいただいた祝電、IAU、アメリカ天文学会、インド天文学会、中国天文学会、台湾天文学会、オーストラリア天文学会より寄せられた祝辞が披露されました。つづいて、3月21日発行の百周年記念切手の贈呈が、郵便事業株式会社を代表して北村憲雄会長から日本天文学会土佐 誠理事長へと行われました。最後に、記念講演として、尾崎洋二氏（東京大学名誉教授）により、天文学のこの百年について、特に日本での天文学の進展について世界の天文学の動向にも目を配りながら、お話いただきました。講演終了後は写真展会場にてささやかながらワインをご用意し、短い時間でしたが懐かしい写真に囲まれる中でご歓談いただきました。

学士会館での祝賀会には、国内外からの来賓を含め160名の方がご出席され、レセプションに続き正賓を楽しみながらの華やかな雰囲気の中、とても和やかな会となりました。ご来賓の日本学術会議の金澤一郎会長、英国天文学会会長 Prof. Michael Rowan-Robinson、韓国天文学会会長 Prof. Young Woon Kang、ヨーロッパ天文学会会長

Prof. Joachim Krautter からも祝辞をいただきました。出席された方々には、特製の台紙に挟み込んだ百周年記念切手、および会員の皆さまより一足早く百年史「日本の天文学の百年」を記念品としてお持ち帰りいただきました。

こうして百周年記念講演会および祝賀会が滞りなく執り行えましたのも、会員の皆様をはじめ、関係する皆様方のご支援とご尽力によるものと、

深く感謝申し上げます。この百年は「日本の天文学の百年」にあるとおり、目覚しい進歩、数かずの新しい発見により築られました。天文学の進歩と普及という本会の趣旨のもと、次の百年もさらなる発展に貢献できるよう今後も努めてまいります。

理事長 土佐 誠

副理事長 国枝秀世、柴橋博資

祝 辞

本日、ここに、社団法人日本天文学会百周年記念講演会が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

日本天文学会は、明治 41 年に天文学の進歩及び普及を目的として創立されて以来、一世紀にわたる時代の変遷の中で、天文学の発展に寄与されるとともに、研究成果を市民や青少年まで広く普及することに貢献されてきました。これまでの貴学会の歴代理事長をはじめ、会員の皆様のご尽力に対し、心から敬意を表します。

天文学は、人類の自然観の根幹をなし、人間の知的欲求をかき立てる宇宙を対象としています。百人一首で有名な藤原定家が「明月記」に客星現る、として 1054 年の超新星爆発を記録しているという事実からもわかるように、日本人は、古来、天文に多大な興味を抱いてきました。江戸時代には、暦法を作るための天体観測の技術や精度の向上が図られ、観測結果を理論研究にフィードバックするなど、近代的な研究手法もすでに取り入れられていました。また、その後の近代天文学の発展過程においては、文化勲章第一号でもある木村 栄先生の Z 項の発見や平山清次先生の小惑星の族の発見など世界的な評価を受ける成果を発信してこれ、その伝統が今日の日本の天文学に反映されております。

天文学研究の大きな課題は、「起源」の解明にあると言えます。現代においては、宇宙そのものの起源、宇宙における構造の起源、星・惑星系の起源、引いては宇宙における生命の起源の問題が具体的な課題となっています。これらの問題が理論的な考察のみならず、観測的な実証によって解き明かされる道が見え始めているところに、二十一世紀初頭の天文学研究の著しい特徴があります。

文部科学省では、大型光学赤外線望遠鏡「すばる」による天体観測、「ひので」「あかり」「すざく」などの天文科学衛星による宇宙からの天文学の研究、日本、米国および欧州の国際協力によって進められている「アルマ計画」、「スーパーカミオカンデ」によるニュートリノ研究など、まさに「起源」の解明を目指す天文学の独創的・先端的基礎研究の支援に努めているところです。こうした多様で自発的な学術研究活動を支える上で、天文学分野の幅広い人材と優れた知識を集約している貴学会は、極めて重要な役割を果たしていると考えております。

本日の式典を契機に、貴学会が、天文学分野で世界をリードする学会として、学術や文化の発展に貢献されますことを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

平成 20 年 3 月 23 日

文部科学大臣 渡海紀三朗